

# 第43回 全国中学生人権作文コンテスト 滋賀県大会入賞作文集



人権イメージキャラクター  
人KENまもる君・人KENあゆみちゃん

大津地方法務局  
滋賀県人権擁護委員連合会

# 第43回全国中学生人権作文コンテスト 滋賀県大会表彰式

～ 令和7年1月25日(土) 甲西文化ホール ～

## 表彰式



表彰状授与



優秀作品朗読



入賞者記念撮影①

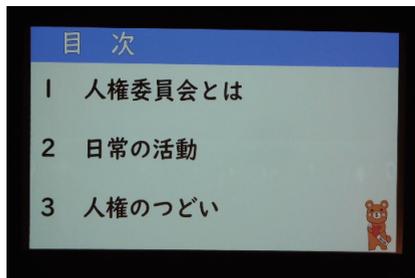


入賞者記念撮影②

## 人権ふれあいのつどい ～中学生の語る想い～



甲西吹奏楽団ジュニアバンド  
による演奏披露



湖南市立甲西中学校の  
中学生による人権に関する活動発表

# はしがき

法務省と全国人権擁護委員連合会は、人権尊重思想の普及高揚を図るための啓発活動の一環として、昭和56年度から「全国中学生人権作文コンテスト」を実施しています。

本コンテストは、次代を担う中学生を対象に、人権についての作文に取り組むことを通じて、人権尊重の重要性、必要性について理解を深め、豊かな人権感覚を身に付けてもらうことを目的として実施しているもので、本年度で43回目となりました。

大津地方法務局と滋賀県人権擁護委員連合会が実施しました同コンテスト滋賀県大会には、県内の61校から7,297編の作品の応募をいただきました。寄せられた作品は、日常生活の中から得た体験や、日頃感じたことが題材となっており、「戦争や平和」に関する問題についての作品が数多くあったほか、「インターネット」や「こどもの人権問題」や「環境問題」をテーマとする作品が目立ちました。いずれの作品も、中学生らしい純粋な感覚で物事を捉えており、身近な人権問題に対する自らの考えが素直に表現されています。この作文集を一人でも多くの方々にお読みいただき、人権尊重の輪が更に大きく広がることを願っています。

おわりに、本大会の実施に当たり、御応募いただきました中学生の皆様を始め、御後援いただきました滋賀県教育委員会、NHK大津放送局、京都新聞、びわ湖放送株式会社、KBS京都の皆様方並びに多大な御支援をいただきました各市町教育委員会及び中学校等関係各方面の皆様方に対しまして、心から感謝申し上げます。

令和7年3月

大津地方法務局  
滋賀県人権擁護委員連合会

# 目 次

## 実施機関

第43回全国中学生人権作文コンテスト滋賀県大会実施機関 … 1

## 入賞作文

(注：学校名は令和7年1月1日現在のものを掲載しています。)

### 【大津地方法務局長賞】

A S D と人権—たくさんの苦勞と支えがあったからこそ生きている—  
…………長 浜 市 立 高 月 中 学 校 の 生 徒 の 作 品 … 2

### 【滋賀県人権擁護委員連合会会長賞】

Do you know "Kyoudaiji"?  
…………… 匿名の生徒の作品 … 4

### 【滋賀県教育委員会教育長賞】

「特攻隊」を通して  
…………彦 根 市 立 西 中 学 校 2 年 大 谷 名 月 … 6

### 【NHK大津放送局長賞】

笑顔のピエロ  
…………立 命 館 守 山 中 学 校 3 年 池 内 悠 … 8

### 【京都新聞賞】

自分らしく生きるために  
…………滋賀大学教育学部附属中学校 2年 中瀬 翔 貴 … 10

### 【BBCびわ湖放送賞】

違いを認め合える自分になる  
…………長 浜 市 立 浅 井 中 学 校 2 年 北 川 陽 愛 … 12

### 【KBS京都放送賞】

異国で学んだこと  
…………近江八幡市立八幡東中学校 2年 武市 舞子 … 14

### 【審査員特別賞】

外国人差別をなくすために  
…………立 命 館 守 山 中 学 校 3 年 上 田 芽 愛 … 16

「入れ墨・タトゥーのある方も大歓迎！」

……甲賀市立甲南中学校 1年 富永結乃 … 18

父の故郷で学んだこと

……近江八幡市立八幡東中学校 2年 平田想乃 … 20

## 【奨励賞】

◇ 十人十色が大切にされる世界へ

……立命館守山中学校 1年 金岡柚季 … 21

◇ それってイジメじゃない？

……甲賀市立甲南中学校 2年 望月蒼太 … 23

◇ 高れい化社会について

……甲賀市立甲南中学校 1年 鳶田煌大 … 25

◇ ぼくの妹

……甲賀市立甲南中学校 2年 宮本 凌 … 26

◇ 「あたりまえ」を疑う力

……甲賀市立甲南中学校 2年 三谷和奏 … 27

◇ イジリとイジメ

……愛荘町立愛知中学校 1年 中山篤人 … 28

◇ 性別でなく挑戦できることに胸を張りたい。

……長浜市立南中学校 2年 北川莉子 … 30

◇ いじめゼロの世界

……長浜市立浅井中学校の生徒の作品 … 31

◇ 明るい未来に向けて

……長浜市立びわ中学校 1年 藤田藍衣 … 33

## 感謝状贈呈校

第43回全国中学生人権作文コンテスト法務省人権擁護局長  
全国人権擁護委員連合会長感謝状贈呈校

… 35



## 第43回全国中学生人権作文コンテスト

### <後援団体>

滋 賀 県 教 育 委 員 会

N H K 大 津 放 送 局

京 都 新 聞

び わ 湖 放 送 株 式 会 社

K B S 京 都

(順不同・敬称略)

### <主催者>

大 津 地 方 法 務 局

滋 賀 県 人 権 擁 護 委 員 連 合 会

## 【大津地方法務局長賞】

# ASDと人権—たくさんの苦労と 支えがあったからこそ生きている—

長浜市立高月中学校の生徒の作品

私には、生まれつきASD（自閉スペクトラム症）があります。五さいのときに、守山の病院でASDとしんだんされたとお母さんから聞いています。重症な方ではありませんので、特別支援学級ではなく普通学級で過ごしていますが、普通学級だからこそその苦労もたくさんあります。

ASDの特性の一つに、運動を苦手とする傾向があります。

私は剣道部に入っています。小学校の時は剣道とスイミングを習っていました。とても運動神経が悪く、人の二倍三倍努力をしても出来ないときがしばしばありました。私は頭では分かっているのに、体が思う通りに動かない。自分よりあとからはじめた子にあとというまにぬかされる。「なんで私だけこんなに出来ないんだろう」と、とてもみじめに感じやめたくなる時が何度もありました。

そんな時にいつも助けてくれたのが、お母さんの存在でした。私が「行きたくない」と言うのと「きっと大丈夫だから」と励ましてくれ、「やめたいなあ」と言うのと「今していることは報われる」「努力していることはこれからの人生で役に立つ」と言ってくれました。行く前は「嫌だなあ」と思っている、行ったら「今日行ってよかった」と思える日がありました。終わった後すごく達成感があるのです。私を今も応援してくれているお母さんに感謝しています。

そして私はあまり友達がつくれません。

ASDの私が持っている特性の二つめは相手とのコミュニケーションをとることが苦手なことです。中学生になってから友達ができましたが、小学校の時は友達と言える子がひとりもいませんでした。「今ここでしゃべったら迷惑かな、こんなことしゃべったら失礼かな」と考えすぎてしまいます。私は自分からしゃべるのではなく、相手から声をかけてもらうまでしゃべることができませんでした。それで低学年の頃は仲が良かった子とも、だんだん学年が上がるにつれしゃべらなくなっていき、とうとうひとりぼっちになってしまいました。でも、ひとりであるのも浮いて変だったのがみんなの中にいましたが、自分だけが空気みたいで、私の存在なんかだれも分かってないんじゃないかという孤独感を感じて、しんどかったです。

中学生になって友達ができた時、今までにないぐらいとっても嬉し

かったです。友達がいる安心感、友達と遊ぶ楽しさ、友達がいるとはこういう事なのかと初めて分かりました。なので、友達関係を大事にして楽しい中学校生活を送っていきたいです。

それから私が長年苦勞していること、それは手先が不器用なことです。ASDの私が持っている特性の三つ目です。

周りの子がちょうちょ結びを難なくできているのに対し、私は中々できません。今も剣道で防具を結ぶ時にとても苦勞しています。図工の授業でみんなができることが私だけでできず、先生に手伝ってもらったりしました。他にもたくさんあります。

不器用なのは本人がやる気がないからではなく、発達障害の一部だということを理解してもらえたらと思います。

このASDには見た目では分からないという特徴があります。車椅子の人や、松葉杖をついている人などは見た目で見分けるので「大丈夫ですか？」と声をかけることができますが、ASDは見た目では分かりません。

私はこのASDという障がいをもっと世間に広まってほしいと思いますが、知られたら理解が広まって少しは楽になるかもと思う反面、「あの子障がい者だよね」みたいに言われたら思うと嫌だなと思ってしまいます。

デメリットなことだらけでたくさん苦勞しましたが、この障がいを持っているからこそ健常者の人には経験できないことが経験できた、と捉えることもできます。

世の中には私よりももっとも苦勞されている方やひどい経験をされている方がおられます。生まれつきの重度障害や、ぎゃくたいなどで差別をされたり、心に深い傷をおったりなどです。

私はASDについていろんな人が理解を深めて、障がいのある人たちが生きやすくなる社会になっていけたらいいと思います。

## 【審査講評】

---

本作品は、「私には、生まれつきASD（自閉スペクトラム症）があります。」で始まり、筆者の日常生活の様子を交えながら、自身のASDの特性が述べられていきます。体が思うとおりに動かないこと、コミュニケーションをとることが苦手なこと、手先が不器用なことなどに苦悩するなかで、いつも筆者を応援している母親の気持ちと、母親に対する感謝の気持ちが、ストレートに伝わってきます。

「デメリットだらけで、たくさん苦勞する」と言いつつも、日々の努力によって、着実に成長している様子が想像でき、孤独だと感じていた筆者に友達ができたと分かって、目頭が熱くなりました。

筆者の「（ASDだからこそ）健常者には経験できないことが経験で

きた」、「たくさん苦勞と支えがあったからこそ生きている」という思いから、前向きに生きようとする強い気持ちが伝わってきて、心の底からエールを贈りたくなります。

これからも、様々な経験を通して、更に豊かな人権感覚を身に付け、大きく成長することを期待せずにはられない作品です。

大津地方法務局長 松尾 力実

## 【滋賀県人権擁護委員連合会会長賞】

### Do you know "Kyoudaiji" ?

匿名の生徒の作品

突然だが、あなたは「きょうだい児」という言葉を知っているだろうか。

「きょうだい児」とは、病気や障がいのある兄弟姉妹をもつ子供のことだ。「きょうだい児」は昨今ネットやニュースなどで注目されるようになり、日本の人口の五パーセント以上はいると推測されている。

今回は、「きょうだい児」である私の体験を紹介して、「きょうだい児」について知ってもらおうと思う。

私はきょうだい児で、障がいのある兄と弟がいる。兄は特別支援のクラスに通っており、弟は発達障害と知的障害がある。兄も弟も興味のあることに熱中できる、優しい人だと私は思っている。

ところで、私は小さい頃からいろんな人に

「しっかりした子だね。」

とよく言われる。これは、親がよく兄や弟のほうを気にかけていたので、「自分がしっかりしなきゃ」という責任感が芽生えたからだろうと思う。

一方で、兄や弟より一人でできることが多かったのも、親にかまってもらったことが少なく、我慢をすることも少なくはなかった。そのため、多少嫌なことがあっても我慢するようになってしまい、ストレスを爆発寸前まで溜め込んでしまうようになった。

このように、小さい頃の通常とは少し違った家族環境が、少なからず私の人格形成に影響を与えていたんだろうなと今になって感じている。

次に、小学校高学年になるにつれて、友人と兄弟構成についての話をするのを少し避けていくようになった。兄が特別支援のクラスであることや、弟の言葉を話すのが他の人より遅れていたことが、なぜかとても

恥ずかしく感じてしまったからだ。また、仮にその話をして、友人に兄と弟に対しての否定的な言葉を言われるかもしれないことが怖かったからだ。したがって、

「なんでお兄ちゃん特別支援のクラスなの」というふうに詳しいことについての質問をされると、話を濁して違う話題に変えようとしたりと、その話から逃げるようになり、特に仲良い友人数人にしか兄と弟の障がい関係の話はしないようになった。

中学生になって、兄と弟のことが恥ずかしいと感じてしまうことはなくなり、今では、自分から兄と弟のことについて話すことはないが、聞かれたら普通に答えられるようにはなった。障がいについて、なんとなくの自分なりの考えを持ち始めるようになり、障がいのある人に否定的なことを言う人がもしいたら、その人に自分の考えを話して、否定的なことを言うのをやめさせようとするぐらいには、障がいのあるきょうだいが身近にいる身として、使命感が生まれた。

だが、「親が亡くなったあとに、自分は兄や弟の生活の補助をどのくらい、どのようにすれば良いのか」といった精神的な不安が募り、抱えるようになった。それは現在も、親にも同じきょうだい兄の友人にも相談できずにいる。

「きょうだい兄」について、あなたは少しでも知ることができただろうか。障がいのある人だけではなく、その家族にも、支援や心のケアが必要だ。現状の支援の輪が広がり、「きょうだい兄」が相談をしやすい環境になれば、もっとストレスフリーで「きょうだい兄」が生きていけるようになるなと感じた。

私は、みんなが「障がい」のことだけでなく、「きょうだい兄」についても理解を広げていき、障がいのある人も、その家族にも支援が届いて楽に生きられる、そんな優しい社会になることを望んでいる。

## 【審査講評】

---

「きょうだい兄」という言葉を知っているか？という問いかけから始まり、筆者自身の体験を通して周知するための作文だ。わたし自身この言葉を初めて知った。筆者は障がいのある兄と弟がいる家族環境で育ち、成長する過程で障がいに対する自分なりの考えをしっかりと持つことができている。我慢することでストレスを溜め込んでしまったり、羞恥心や否定されることへの恐怖心から兄弟について隠す時期もあったが、中学生になってからは障がいについて否定的な発言をする人に対してやめてもらうように話すというような使命感も生まれている。自身の体験から人権について真剣に考えることができていると思われる。将来的な不安も多く、障がいのある人だけでなく、その家族に対する支援や心のケアができる社会になることを切に願う。そのために何ができるかをよく

考え、筆者とともに取り組んでいきたいと感じた。

滋賀県人権擁護委員連合会長 向井 洋子

## 【滋賀県教育委員会教育長賞】

### 「特攻隊」を通して

彦根市立西中学校 2年 大谷 名月

私は「あの花が咲く丘で君とまた出会えたら」という映画を見ました。この作品は、女子高校生が戦時中にタイムスリップをし、特攻隊員と恋をするという映画でした。私は、この映画で特攻隊というのを知りました。そこでインターネットや本で特攻隊について調べたり、特攻隊の出撃基地の一つである知覧に行ってみたりしました。そこで分かったこと、感じたこと、これからの生活について考えました。

まず、特攻とは、第二次世界大戦中に、日本が行った「特別攻撃」という作戦のことです。陸軍の沖縄特攻作戦は、第二次世界大戦末期の一九四五年三月二六日から七月一九日まで行われました。重さ約二五〇kgの爆弾を積んだ戦闘機で敵の船に体当たりし、沈没させるのが目的です。戦闘機ごと敵の船に体当たりするので、必ず命を落とす攻撃です。

この作戦で亡くなった特攻隊員は一七歳から三二歳、平均年齢二一・六歳の一〇三六人でした。今の高校生や大学生と同じ世代の若者たちが特攻で命を失いました。このように若者たちがこの作戦で尊い命を落としたことに衝撃を受けたとともに、すごく悲しい現実だなと思いました。

私は、この特攻作戦というのを知り、特攻隊として、どういう思いで飛び立ったのか気になり、遺書を読んだり、講演を聞いたり、映像を見たりして、いろいろな思いを学び、感じたいと思い、鹿児島県にある知覧特攻平和会館に行きました。

知覧特攻平和会館は、特攻隊の出撃基地であった知覧飛行場の一角に、一九八七年に建てられた博物館です。ここでは、沖縄戦の特攻作戦で戦死された一〇三六名の写真や遺品・記録を後世に残し、このことを多くの人に知ってもらい、特攻を通して戦争のむなしさ、平和の大切さ・ありがたさ、命の尊さを訴え後世に正しく受け継ぎ恒久の平和を願い、建てられました。

私は、知覧特攻平和会館で、二つのことが特に印象に残りました。

一つ目は、遺書です。一番心に残ったのは、穴沢利夫大尉の婚約者の知恵子さんに向けた遺書です。多くの遺書は、「最後で最初の親孝行に

笑って征きます。」など、明るく力強い言葉で書かれていますが、穴沢利夫大尉は、今までの人生を振り返り、最後に「知恵子、会いたい、話したい、無性に。」と心の奥からの本音を出しているところが心に残りました。全員が特攻をしたいと思っている訳ではなく、本当は「まだ死にたくない」と思っていたり、家族や愛する人に会いたいと思っていたのかなと思いました。

二つ目は、語り部の講話です。語り部の方は特攻隊員の思いについてお話しされました。特攻隊の方々は、家族や愛する人の命を守るために、そして、戦争が終わって、残った人たちが自分たちの分まで頑張ってくれると期待と希望を託して沖縄の海に征かれました。戦後、残った人たちは特攻隊員の思いを背負い、今の日本を築きあげたとお話しされました。今の日本は、特攻隊員の方々の思いを受け継ぎ、残った人たちが頑張ってきて、この国があるということが心に残りました。

これから私は、二つのことを大切にしたいです。

一つ目は、一分一秒を大切にすることです。特攻隊員の方々は、生きたくても、生きられませんでした。私は、その分まで最後まで一生懸命に生きています。また、自分がしたいことをできていることに感謝をしたいです。時間があるからしたいことができると思います。自由な時間があることを当たり前と思わず、感謝をしていきたいです。

二つ目は、家族や友達を大切にすることです。特攻隊員は家族や愛する人に会いたくても会えませんでした。でも今は声を聞きたいと思えば、電話をすればいいし、会話したいと思えば、メールなどを送れば会話ができる時代です。しかし、便利な時代だからこそもう一度、家族や友達の大切さやありがたさを考えることが大切だと思いました。

特攻隊員の方々は、家族や愛する人のために、生きたくても沖縄の海に飛んで征きました。今の当り前は、特攻隊員の方々の思いがあり、それを受け継ぎ、努力した方々がいたからこそあるものだと思います。今ある当り前をもう一度考え、いろいろなことに感謝し、一生懸命生きたいです。

## 【審査講評】

筆者は映画をきっかけに特別攻撃に関心を持ち、インターネットや本を活用したり、知覧特攻平和会館まで赴いたりして調べる過程で、未来を奪われてしまった若者の希望、軽視されてきた人々の命など、戦争の現実を目のあたりにしている。そして、自身が享受している平和が、多くの犠牲の上に成り立っていることに気づき、「今」という時間、そして、家族や友達とのつながりを大切に生きていこうとする考えに至っている。

人権尊重の本質は、生命と自由が確保され、幸福を追求する権利が保

障されることにある。しかしながら一度戦争が起こってしまうと、それらはいとも簡単に崩れ去ってしまう。終戦から約80年、戦争による人権侵害をどこまで自分事として捉えることができているのだろうか。こうした中であって、過去に学び、今に活かすことの大切さを改めて想起させてくれる作品になっている。

滋賀県教育委員会事務局人権教育課長 小林 久祥

## 【NHK大津放送局長賞】

### 笑顔のピエロ

立命館守山中学校3年 池内 悠

辺り一面白い壁と寝たきりの子ども達。闘病中は何も変化がない空間。苦しい病気に耐えながら過ごしている姿を励まそうと、笑顔と勇気を与えてくれるピエロの存在がいるのを知ったのは「Kちゃんが行く」という一冊の本からでした。

ホスピタルクラウンという言葉 皆さんは聞いたことがありますか。日本中の小児病棟を訪れて、面白いお話やバルーンアート、歌などを一人一人と関わることを基本とした楽しいイベントをしてくれるピエロの姿をした人のことです。僕はその活動に興味と関心を持ちましたが、実際、自分もホスピタルクラウンに出会ったことがあると聞いて信じられない気持ちでした。

ある時、母が言いました。「ピエロの道化師に心を救ってもらって元気が出た忘れられない思い出がある。」と。

僕は先天性の心臓疾患があり、小さな頃に大きな手術をしました。今までにも何度も入院をし、その度に不調を助けてもらっています。毎回、病院に泊まって看病する母の姿はいつも心配そうで、小さな頃は元気のない僕を震えながらポロポロ泣いて抱きしめていたと聞きました。病気で苦しんでいる小児の病室は、「頑張ろうね。」「少しの我慢で終わるからね。」などと前向きな言葉の中にも悲しい現実が沢山あって、僕はそこが切なく寂しい場所だということを知っています。でもある日、その病室に優しい音楽と笑顔いっぱいのピエロがやって来ました。その瞬間、周りにいた全員が笑いと温かさに包まれて幸せに満ちあふれました。素晴らしく楽しい時間を過ごして、どんなに子ども達やその家族が救われたことでしょうか。本から学んだホスピタルクラウンの存在と、母から聞いたピエロの出会いが重なりました。僕もアンパンマンが苦しみや

痛みを取り除きに来てくれたんだな、と居心地よくその時間を過ごしたのだろうと思います。

僕は今、中学生になって、とても楽しい学校生活を送っています。信頼しあえる仲間や先生にも出会いました。制限で運動が出来ない種目の時は交代してくれる友達、体育が得意な子がチームにいても僕をリーダーにしてくれる気遣い、周りの些細な言動から日々温かさと優しさをもたらしています。助けてもらった命の重みを感じながら、将来、自分には何が出来るだろう、と考えています。僕は固い空気の中で発言をして、場を和ませるのが好きです。ホスピタルクラウンのように愛と温かさを伝えて笑顔に出会える仕事って何だろう、と考えた時、まず自分が笑顔でいることが大事だと思いました。母が病室で元気になれた様に、笑顔や笑いで空気や雰囲気を変えることは、年齢や病気の差を感じず国を超えた関係として繋がっていけないのではないかと考えます。

でも、今現在も世界中で難病と闘い、天井を眺めているだけの生活をする子ども達がいることを決して忘れてはいけません。沢山の涙で溢れ、痛さと苦しさにも耐えながら一生懸命に生きようとしている子ども達や家族が、実際、幸せでいられる権利を最大限に感じられているのか、と問われたら、自分は答えを出すことが出来ません。それでも、世界には病院の他にも心のケアをする目的で、障がい者施設、老人ホーム、児童養護施設、被災地や戦地など、様々な所でホスピタルクラウンの活動が広がっています。おどけて失敗をすることで相手を優位に立たせて笑いを誘うスキルによって、肉体的な苦痛や精神的な不安が少しでも安らぎ、気力や生きる力を与え、一人でも心を救えることが出来るなら、この活動が幸せな空間の人権として守られているのだと僕は思うし、沢山の場所で自然に広がればいいのにな、と切に願います。

「Kちゃんが行く」はノンフィクションの物語ですが、大きな衝撃を受けたのは言うまでもなく、裏舞台では色々な気持ちの問題や課題があっても常に笑顔を決やさずに子ども達と向き合い、信念を持つ、この一冊は僕にとって忘れてはいけない原点と目標となりました。

人々の命を感じ、自分の今の環境に感謝しながら、微力でも人々の幸せを届けられる自分であるために、様々な社会問題に目を向けて現実を知り、そこで意見や考えを持って立ち止まり、声をあげることが必要です。

僕の進路や未来像が楽しく笑いに変えられる性格が活かされ、世の中の人に役立つ仕事へと導いてくれることを信じ、挨拶から始まる笑顔の種を増やし、何気ない日常の中で、小さなHAPPINESSを届けられるように成長していきたいです。

## 【審査講評】

「小児病室は前向きな言葉の中にも悲しい現実がある」という端的な描写が重く心に響きました。家族と離れて入院生活を経験した池内さんだからこそ、よりそれを実感していたのかもしれませんが。

今回、私は恥ずかしながら、ホスピタルクラウンの活動をはじめて知りました。その活動が、病室に笑顔を生み、患者に勇気をもたらすきっかけになることをよく理解できました。人とのつながりこそ副作用のない薬になるのだと思いました。私は常々、病院に対して知れない息苦しさを感じてしまうのですが、私の心のモヤモヤを吹き消してくれるかのような作文に出会えたことは嬉しい限りです。

池内さんは笑顔のピエロとの出会いを機に、「笑顔の種を増やし、小さなハッピーを届ける」と決意しています。その決意を実行して、ホスピタルクラウンの活動を広く伝えていってください。そうすれば「小児病室の人権」がますます守られていくに違いありません。

日本放送協会大津放送局長 小磯 亮

## 【京都新聞賞】

### 自分らしく生きるために

滋賀大学教育学部附属中学校2年 中瀬 翔貴

僕はこの夏休み、母と姉と一緒に大学病院へ行った。この病院には、様々な病気の人が入院や通院をしていて車いすの人など、身体の不自由な人もたくさんいた。その日はすごく混んでいてロビーにもたくさんの人がいて、ざわざわ騒がしい中、僕はポーッと椅子に座り会計を待っていた。すると僕の視界の左側にふと違和感があった。まじまじと目を向けると僕よりも遥かに体格の良い後ろ姿、金髪の長い毛と制服であろうひざ丈の紺のプリーツスカートが目に入った。僕は目が離せなかった。ずっとその人がこちらを向くのを目で追っていた。そしてこちらを向いた。手にはアニメのキャラクターの人形をもち、同じキャラクターのTシャツを着ていた。恐らく金髪の長い毛もそのキャラクターをイメージしているんだ、そう思った。その人は僕の父よりも少し年上に見え、男性だった。ふと周りに目を向けるとチラチラその人を僕のように見ている人が何人かいた。僕はその時、初めてその人を興味本位にじっと見ていた自分のことを人として恥ずかしいと思った。

僕の姉は小学生の頃、病気になり一年間入院していた。入院してすぐ

に髪の毛が無くなっていき、退院をしてきた頃には、僕の知っている姉の目印でもあったポニーテールで一本に結んだ長い髪の毛の姿は一変し、丸坊主になっていた。母は姉にその頭を隠すように帽子を被りなさいと常に口うるさく言っていた。でも姉は母に「ママが恥ずかしいと思っているだけでしょ？」と言ったことを覚えている。その後、姉は堂々と丸坊主で学校の中で過ごした。僕はその頃、幼かったので分らなかったけれど、今改めて考えてみると、堂々と姉の丸坊主で学校へ行くという行動ができる環境を作った周りの友達、先生達、学校全体がすごいと思う。なんだか世の中は謝罪や罰として丸坊主にするだとか、丸坊主に対しての負のイメージがあるし、女の子が丸坊主はおかしいという世間一般的な考えもある。だけども姉はからかわれたり、ジロジロ見られたり、陰口を叩かれたり、少なくとも学校の中ではそういったことはなかったという。人として尊重され姉の丸坊主で学校へ行くという選択を変な事という捉え方をされなかった。そしてその姉は病院で見たあの男性を好奇の目で見ることはなかった。

そもそも姉は、普段から人を良いとか悪いとか判断するような発言はしない。僕が何かに悩んで、これで良いのかと判断を仰いだ時も「良いやん」としか言わない。自分が良いと思ったことが一番自分に合っているし、人の判断で自分にとって無理な選択をすることは、自分自身を否定してしまう事だからだ。〇〇だからこうしなければならないのではなく何より大切なことは自分はこうなりたい、こうしたいという気持ちだ。

僕はこの出来事を通して、改めて自分らしさを表現することの大切さ、そして他人の自分らしさを世の中のものさしに囚われてジャッジしている自分を恥ずかしいと思った。自分らしさを世の中のものさしに囚われず表現ができるからこそ、他人の自分らしさを尊重できる。まず自分自身を大切にできる人になることが、他人を大切にすることとなるんだと学んだ。

## 【審査講評】

---

私たちは価値観や考え方が違う人を奇妙な存在として、理解しようとしていないだろうか。そんなことを考えさせられました。筆者は大病院のロビーで、父親と同世代の男性がアニメキャラクターの人形を手にも、同じような制服のスカートをはき、金色の長髪でいる様子を興味本位に見てしまいます。小学生の頃に病気で髪の毛が抜けてしまった姉のことを思い出し、反省します。友人や先生の理解ある環境の下、意に介さず学校に通う姉の姿を通して「自分らしさを表現する事の大切さ」から「他人の自分らしさを尊重できる」と考えます。社会にはさまざまな価値観や考え方が存在します。しかし異なる立場を受け入れず、人々の分断が世界中で広がっています。人権を大切にする一歩として、違いを

認め合うことが大切ではないでしょうか。その点に気付いたことは素晴らしいと思います。

京都新聞社滋賀本社編集局コンテンツ編集部長 多和 常雄

## 【BBCびわ湖放送賞】

### 違いを認め合える自分になる

長浜市立浅井中学校2年 北川 陽愛

夏といえば「甲子園」。私は、高校野球を見るのが好きです。兄が野球をしているということもあり、家族で野球について話すことはよくあります。

今年の滋賀県代表は、滋賀学園でベスト八という好成績でした。滋賀県代表が負けてしまった後、近畿に残っているお隣の京都代表京都国際を応援することにしました。

京都国際は優勝し、校歌は韓国語でした。私は、校歌を聞いて初めて在日韓国人のためにつくられたのが始まりだったことを知りました。

そこで、京都国際のことについて書かれている記事を読みました。日本と論争になっている「東海（日本海）」が歌われているという記事がありましたが、私には勉強不足でよくわかりませんでした。しかし、野球がやりたくて、韓国系の学校を選び、甲子園で優勝するまで努力した野球部員は何も恥じるなどないと思いました。

韓国語の校歌だったら応援しないのでしょうか？韓国にルーツをもつ学校だったら、応援されないのでしょうか？

決勝戦では、甲子園に京都国際の校歌が流れた時、相手校の関東第一のアルプススタンドからも拍手が沸き起こりました。これは、校歌が韓国語か日本語かで、拍手をするかどうかが変わるわけではないということだと思います。お互い一生懸命に戦い、相手に対する敬意を示す拍手だったんだと思い感動しました。

また、京都国際の小牧監督はインタビューでこんなことを言っていました。「涙がこみ上げてきた瞬間はありましたか。」という質問に対して、「校歌を歌っている時に、関東第一さんの手拍子が、野球を極めようとしている人間同士の熱い気持ち、温かみに一番感動しました。」と答えた記事を見て、改めて感動しました。

どこの国の言葉だから、どこの国の人だからと言って、差別したり非難されるのは、スポーツをする上でも、生活していく上でも、必要のな

いことだと思えます。

家族で京都国際の校歌の話をしました。校歌は日本語があたり前の前提で話をしていましたが、「長浜北高校の校歌はL e f a（リーファ）っていう長浜出身のユニットが作ったいまどきの曲調で高校生が歌いやすい曲なんやで。」「和歌山の高校の校歌はレゲエ調で一步前へ今って歌ってるやん。」という意見もでてきて自由でいいんだという話をしました。

また、今年の夏は、パリでオリンピックが開催されました。オリンピックでは、甲子園のように都道府県代表ではなく、各国の代表が戦うので、優勝すれば国歌が流れます。そこでも選手に対する敬意が示されます。

スポーツをすることは人権の一つであり、すべての個人は、いかなる種類の差別も受けることなく、オリンピック精神に基づき、スポーツをする機会を与えられなければならない。オリンピック精神においては友情、連帯、フェアプレーの精神と共に相互理解が求められているとあります。

スポーツを通して、文化や国籍などさまざまな違いを乗り越えていくことは、平和な世界を実現していくことに近づく第一歩なのではないかと思えます。

甲子園やオリンピックは、小中高生といったこれからの担う子ども達が、より身近に接するスポーツの大会です。その中で、いろんな国で違いがあることは悪いことではなく、違いを知る機会になればいいと思いました。歴史的な背景や現在も続いている国同士の問題、自分の力では何も変えられないと思うけれど、自分の中で差別をしない考えを持つことはできると思えます。

今回、日本にもいろんな国の学校があること、また、他の国にルーツをもつ学校であっても日本人は通学することもできるし、強い意志と目的を持って学校を選んでいる人達がいること、自分が決めたことは、他の人が何と言おうと恥ずかしいことではなく胸を張って前を向けばいいこと、いろんなことを学ぶことができました。

どこの国か、何語を話すのか、肌の色や容姿の違いなど、違うというところを認め合えるような自分でありたいと思いました。

## 【審査講評】

---

今夏、甲子園が沸いた。滋賀学園の応援ダンス、大社高校の快進撃、そして京都国際の優勝と、様々な話題がファンを魅了した。京都国際は確かに、韓国の民族学校だった歴史がある。私が京都市内の高校生だった30数年昔、この学校に対しては、特別な見方をすることが一般的だったと記憶している。どこか距離を置くような、避けるような空気が

あった。背景には戦前戦後を通じた日韓両国の事情もあっただろう。しかし時が流れ世代が変わった。この夏、京都国際の歌声に添えられたのは、栄冠に輝いた高校生への澄んだ賞賛だった。筆者の北川さんは、甲子園などの大会が「小中高生が国ごとの違いを知る機会になればいい」と前向きに言う。家族で各校の校歌について、話し合うシーンも暖かい。主張には、若い世代から吹く風が、過去のよどんだ空気を吹き飛ばしたかのような爽やかさがある。かつての我々のこだわりは何だったのか。毅然と指摘する作文だ。

びわ湖放送株式会社制作部部長 大口 隆之

## 【KBS京都放送賞】

### 異国で学んだこと

近江八幡市立八幡東中学校2年 武市 舞子

待ちに待った夏休み。家族でフィリピンへ旅行に行きました。自然が豊かで、フルーツ天国のこの国で、私は人権について考えさせられる出来事に遭遇します。

ガイドブックに載っている飲食店に入った時のことです。私たち家族が席へ案内されると、隣の席の小さな女の子が、

「ジャパニーズ、ジャパニーズ！」

と何度も連呼して、嫌そうな顔をし、鼻をつまみだしたのです。明らかに私たちが入ってきたことに対して取った行動です。最初は、気にしないようにしていましたが、隣の席なのでどうしても視線はそこにいてしまいます。鼻をつまみ、まるで臭いものでもあるかのようなしぐさ。

何度も目が合い、睨んできているようにも見えました。もしかすると、これが差別なのかとまで思ってしまいました。なぜ、彼女は「日本人」である私たちに対して、そのような行動を起こすのだろうかという気持ちと、その態度に腹立たしさを覚えました。母に、

「なんであんなことされなあかんの？」

と怒りにまかせて言うと母は、

「フィリピンの人で、日本が嫌いな人もいるんだよ。あなたが悪いわけではないけど、昔に戦争があったときに、日本や、日本人から嫌なことをされて、嫌いに思っている人もいるのを知っておいてね。」

と、その場を収められました。楽しみにしていた食事、あまり美味しく感じなかったことを覚えています。昔あった戦争が、今を生きる私た

ちに、こうやって差別を生み、心と心の壁を作ってしまうほど深刻な影響を与えることを実感しました。

ホテルに戻り、インターネットでフィリピンと日本について調べました。一九四四年に起こった太平洋戦争で、日本はフィリピンのマニラを占領し、ルソン島に空襲を仕掛け、太平洋戦争の中で最も多くの犠牲者がでたという歴史があることを知りました。私がいらないだけで、お店で出会った女の子は、その戦争で親類を失っていたかもしれないと思うと、あんな行動をとっても仕方がないと思いました。本当のことは、彼女に聞いてみないとわからないけれど、私が勝手に相手を悪い人だと決めつけてしまったことは、軽率だったなと反省しました。

また、マーケットに行ったときのこと。私たち家族がある店の前で立っていると、二歳くらいの小さな男の子がやってきて、私たちに物乞いをしてきました。私が断ると、母へ、父へと順番に手を出し、何か頂戴と言っているようでした。裸足に、シャツ一枚だけの彼の服装に、かわいそうだと思い、目を逸らしてしまいました。何か私にできることはないのだろうか。そこでも、後味の悪い体験をしました。ホテルに戻ってから、父と母からそのことについて話をされました。

「物乞いを断ることは、とてもしんどいよね。仮にあの場所で私たちが何かを与えれば、私たちの気持ちは満足するけれど、彼らはずっとそうして生きていこうとする。そうではなくて、彼らの未来を想像して、物乞いをする生活から抜け出していけるような仕組みがないか考えることが私たちの使命だよ。」

と言われました。人としてしっかり地に足をつけて生きていくためには、国の力も必要ですが、私たち個人でもできることがあるのではないかと考えました。

人が人らしく生きていくためには、その裏にある歴史を知り、彼らの未来に思いをはせる。相手を思いやり、笑って過ごせる世界にしていく必要があります。そのためには、貧富の差をなくすことや、戦争をしないとといった道徳的なことは当然ですが、まずは、人を見た目で判断せずに、思いやりの心をもって行動することが、私たちにもできるのではないのでしょうか。相手の気持ちを考えれば、言葉が通じなくなっても、心がつながり合えるはずです。今なら、鼻をつまんだ彼女の行動や、物乞いをしてきた少年の生活の背景を理解することができます。このフィリピンでの経験を通して、まずは周囲にいる人を大切にしたいと思いました。そして、相手の考えや行動の背景にあるものを想像し、表面的なところだけで人を判断して決めつけないと心に誓いました。

私の行動が変われば、周りの人の行動も少しずつ変化すると思います。周囲の人にもそういう目線や考え方を持ってもらい、差別や偏見、憎しみや悲しみが無い世の中になることを強く願います。

## 【審査講評】

導入部分からの一文は、爽やかな展開を予想させましたが、「鼻をつまんだ彼女」・「物乞いをしてきた少年」という二人のフィリピン人との出会いで感じた、とまどいと葛藤がひしひしと伝わってくる高い表現力で作品に引き込まれていきました。

その表現力の一方で、ご自身の疑問をご両親へ率直に投げかけ、またご両親は真摯に向き合い意見を交えて解決への道を共に歩んでいるという関係性も非常に感服し羨ましくも感じた次第です。

その昔、著名な教授に「教育は共育だ」と教えられたことを思い出しました。差別や偏見は一朝一夕で解決できるような問題ではありませんが、年齢・肩書に関係なく話し合える関係、助け合う環境が大切なのだと本作品で改めて感じさせられました。

ご家族と一緒に導き出した考えを是非明日以降も体現してもらえるよう期待しています。

株式会社京都放送滋賀支社長 森永 貴則

## 【審査員特別賞】

### 外国人差別をなくすために

立命館守山中学校3年 上田 芽愛

私はつい最近まで「外人（ガイジン）さん」という言葉になんの疑問も抱かなかった。私自身日々の日常会話のなかでも特に意識せず使っていた。しかし、ある日の国語の授業で先生が「外国人のことを外人というのは差別用語です。」とおっしゃった。「どうして？外国人と同じ意味じゃないの？」私は気になって家で調べてみた。すると、外人とは日本国籍でない人という意味だけでなく、仲間以外の人、よそ者という意味もあると書いてあった。外国から来た人は邦人から「外人（ガイジン）」と言われてひどく辛い思いをしたかもしれない。自分が何も考えず使っていた言葉にそんな差別的な意味があったなんて、悲しい気持ちでいっぱいになった。

私は、他にも私が知らない外国人差別があるかもしれないと思い調べていると、こんなニュースが目に入った。それは外国人というだけでマンションやアパートの入居を断られたり、日本語がわからない子供が学校でいじめにあったりしているという記事だった。特に私が衝撃を受けたのは、地方の病院で日本語がわからないため病院の受診ができないと

ということだ。命に関わるかもしれないのに差別で受診を断るなどあってはならない。私は人権は日本に来ている世界中の国籍の人が平等に持っているべきであると考えている。だから外国人だからという理由で差別されたり、独断と偏見で自分達とは違うと突き放されるのは間違っていると思う。

しかし、やはり外国人にマイナスなイメージを持つ人もいるかもしれない。内閣府が平成二十四年に実施した「人権擁護に関する世論調査」での「日本国内に住んでいる外国人についてどのような人権問題が現在発生していると思うか？」という質問に対し、「習慣や風習などが違っていることが受け入れられない」という回答が全体の三十五%にも上った。また、ヘイトスピーチという特定の国の出身者であることまたはその子孫であることのみを理由に、日本社会から追い出そうとしたり危害を加えようとしたりするなどの一方的な内容のスピーチも行われている。私は、外国人は日本という同じ場所で暮らしている助け合える仲間なのに、言語や文化、宗教が違うことが日本では少数派であるがため理解されず、生活がしづらい状況に陥ってしまっている人を助けたい。では、差別や偏見をなくするにはどうすればよいのか。私に出来ることは限られているけれどこの考えを広げて、差別に反対する人が増えれば外国人の住みやすい環境になると考える。

そのために、私ができる具体的な方法を三つ考えた。まず、一つ目は、外国人に対する差別の現状を知ることだ。どんな差別が起きているのか、なぜそのようなことが起きているのか、考える機会を作る。インターネットを使って調べたり、実際に外国人と交流したりすることで自分の意見を持つことができると思う。二つ目は、差別しているつもりがなくても差別的な発言をしているかもしれないことに注意することだ。文頭に私が「外人（ガイジン）」という言葉で差別的な意味だと知らず使ってしまったことを書いたが、無知であることが相手を傷つけるつもりはなくても嫌な思いをさせてしまう原因になるのはこの上なく辛いことだと思う。さらに、そのような知識をつけた上で、英語の勉強も頑張りたい。たくさんの方の人とコミュニケーションを取ることができるツールになるし、お互いの違う文化を知れると考える。正直、学校で勉強する英語はとても難しく苦手だが様々な国の人と、英語が話せるという共通点で会話をしたり意見を交換できるのは憧れだし魅力的だと感じる。そして三つ目は、外国人と共生するという意識を持つことだ。ここ最近、日本に在留する外国人の数は年々増えている。私の家の近くにも外国人の住む寮がある。時折、留学生と地域の住民との交流会が開かれている。こうした交流会に出ることで一緒に暮らす仲間として文化の違いも理解しようという心が生まれると思う。だから、まずはどんな考えや価値観を持った人であるか知ろうと努力したい。

そして、私は今年海外研修として外国へ行ってホームステイする。そこで外国の文化や生活をたくさん知りたいし、外国人が日本に来るように私も外国へ行くと、その不安やどのようなことが嬉しいか、辛いと思うかを考える機会になると思う。充実した研修にするため、積極的に行動できるように今からできることを全力で頑張りたい。

グローバル化が進み違う国の人と手を取り合うことが必要な社会で差別などあってはならない。人々が国籍関係なく一人ひとりの個性を尊重できるようになれば差別は無くなっていくと考える。差別によって苦しむ世界中の人が幸せになる日が来ることを願っている。

## 【審査員特別賞】

### 「入れ墨・タトゥーのある方も大歓迎！」

甲賀市立甲南中学校1年 富永 結乃

「入れ墨・タトゥーがある方は入浴をお断りしています」。私は旅行先の温泉でその貼り紙を目にし、頭の中が疑問符でいっぱいになった。ごていねいに、入れ墨のある男性をバッテンマークで隠すイラストまでそえてある。

「ねえ、なんでタトゥーのある人は温泉に入っちゃいけないのかな」

何気なく母にたずねると、母は一瞬考えあぐねるような仕草をした。

「私たちの世代では「タトゥー入れている人は暴力団」みたいなイメージがあるから。結乃も、龍と虎が背中にでっかく描かれないかつい人がいたら、なんとなく怖いって思うでしょう？お客さんが不安な気分にならないように、めんどくさいトラブルが起こらないように、お店側は貼り紙をするの。イマドキ、ファッションでする人の方が多いだろうけどね」

母の説明のおかげで、貼り紙の意味を理解できた。だが、納得はできなかった。

見た目で人を判断してはいけませんと、小学校で習った。だから、社会は外見だけを見て差別する人などいないと思っていた。しかし、現実には違った。黒人は嫌われてしまうし、病気の後遺症が残る人はさげられるし、体の一部が欠けている方は同情と好奇の目にさらされる。そして、入れ墨のある人間は、「なんとなく怖い」というだけで様々な施設から拒否される。

母が言った通り、最近はお洒落で入れ墨をする人が沢山いる。それな

のに、私たちはたいした理由もなく「嫌だ」と思ってしまう。

差別や偏見なんてこと、私はしていないと考えていた。だが、先程の母の例えで、龍と虎の入れ墨がある人を思い浮かべたとき、怖いな、近づきたくないな、といった声が脳内に流れた。それは、まぎれもなく私自身の声だった。そのとき、差別も偏見も意外と身近にあって、考えているよりずっと深く、ずっと強く、私たちに根づいていることに気づかされた。

では、どうすれば差別や偏見をなくすことができるのだろうか。世界中の施設からあの貼り紙を取り除けばいい、わけがない。上辺だけの解決ではなく、根本的な原因を見つけて、それをありとあらゆる人間から消し去らなければいけないと、私は考える。

しかし、社会ではその「上辺だけの解決」が多いと思う。私は先程の温泉とはまた別の場所で、こんな貼り紙を見つけていた。

「タトゥーを入れているお客様は、ラッシュガードなどの着用をお願いします」

一見、これで解決のようにも見える。入れ墨がある人でも、その施設に入れるのだから。だが、これは「上辺だけの解決」であり「根本的な解決」ではない。人々の「入れ墨がある人は嫌だ」という気持ちは、少しも変わっていないからだ。

上辺だけの解決は、有害な虫がわいているのを見つけたとき、その場所を封鎖してしまうのと同じ行為だ。殺虫剤をふきかけたり、虫を遠い所へ逃がしたりしないと、その虫は小さなすきまからあつという間にはい出てくる。そこをまた封鎖しても、いたちごっこのように虫はまた出てくるのだ。今の社会は、人々の不満の上澄みだけをすくい取り、その場しのぎの処理をしているだけである。

入れ墨をするのはその人の自由だ。私たちがどうこう言う資格はない。しかし、このままだと「入れ墨をしたい」という人が、「誰かから蔑まれたり、入りたい場所に入れなくなったりするのが嫌だ」だから「やっぱり入れ墨するのはやめよう・・・」と夢をあきらめてしまうかもしれない。

そんなことが起こらないように、私たちは無意識の差別や偏見をなくし、「上辺だけの解決」ではなく「根本的な解決」をしなければいけないのだ。入れ墨に限らず、何も悪いことをしていないのに良くないイメージを持たれている人々を、彼ら彼女らをもうこれ以上傷つけないために。これから何かをしようとしている誰かを応援するために。私たちは、がんばらなければならない。

「入れ墨・タトゥーのある方も大歓迎！」。いつしかそんな貼り紙が貼られ、やがて、その貼り紙も「当たり前だから」と貼らないでよい未来、そんな未来を、私たちが創っていきたい。

## 【審査員特別賞】

### 父の故郷で学んだこと

近江八幡市立八幡東中学校 2年 平田 想乃

私は夏休みに父の故郷である広島へ家族で旅行に行った。私の兄は小学生の時、広島へ修学旅行に行く前に平和について学び、平和記念公園にある慰霊碑に納める千羽鶴を折っていたのだが、コロナウイルスが流行っていたため広島へ修学旅行に行けなかった。私の時にはなんとか修学旅行へ行けたものの、行先が広島ではなかった。そのため、祖父母の家へ帰省するついでに広島市内を観光することになった。

平和記念公園へ行ったとき、父が「昔は原爆で亡くなった韓国人の慰霊碑は平和記念公園の外にあったんだよ。しかも小さくて教えてもらわないとわからないぐらいの目立たない慰霊碑だった。今は日本人慰霊碑と同じ公園内に新しく移されたけれど・・・。」と教えてくれた。私は父がなぜそのことを知っていたのか、なぜ韓国人の慰霊碑が日本人の慰霊碑とは別の場所に建てられたのかが気になり、旅行から帰って父に聞いたり、調べたりしてみた。

父によると、父が小学生の時は広島に原爆が投下された日である八月六日と終戦の日である八月十五日に平和集会という行事があり、夏休み中に登校し、平和について勉強していたそうだ。その平和集会ではなぜ戦争をしてはいけないのか、戦争がどれほど恐ろしいものであるのかなどを学んでいたそうだ。そこで韓国人と日本人の差別についても学んでいた。

韓国人慰霊碑が公園外にあった理由を調べてみた。日本人は日本の植民地支配により日本に渡った韓国人を差別していたからだとわかった。韓国人犠牲者慰霊碑はもともと公園の対岸にある本川橋西詰にあったが、慰霊碑ができてから三十年後ようやく公園内に移設されたそうだ。私は公園の外に慰霊碑があるのは、韓国人も日本人も同じ人間なのに差別しており、おかしいと感じた。また、同じ場所・同じ時間・同じ被害にあっているのに、なぜ日本人と同じ扱いをされないのかがとてもおかしいと思った。現在は公園内に慰霊碑が移されたことによって、日本人も韓国人も同じ被害者として慰霊され、差別の象徴から平和や共生の象徴として皆の思いが変化しつつあると知り、心から良かったなと思った。

他にも父が滋賀県に移り住んで驚いたことを聞いた。父は小学校から高校まで一度も君が代を習ったことも歌ったこともなく、学校で国旗も見たことがないそうだ。なぜなら君が代を歌うことや、国旗を揚げることは戦争を思い出すイメージがあるとして広島では避けられることがあ

るからだそうだ。私は君が代や国旗掲揚に対してそのような考え方もあるのかと驚いた。

家族旅行で父の母校である県立広島工業高校にも行ってみた。校内には被爆者の慰霊碑があり、また高校のすぐ横には原爆投下により建物に被害を受けたままの姿が残っている広島陸軍被服支廠（当時は軍服などを作っていた工場）があった。爆心地から約七キロメートル離れている場所でも窓や壁がボロボロになっており、すごい威力だったことがわかり、とても怖かった。そして父は昔から戦争に身近に触れてきたのだなと思った。戦争で大きな被害を受けた広島の人たちは、町じゅうに爪跡が残っているため、今も戦争に身近に触れている。しかし、滋賀県に住んでいる私は身近に戦争に触れる機会があまりなく、日常でイメージがわからないため、君が代を歌うことや国旗掲揚に対して何も疑問を持たず、当たり前のように思っている。君が代を歌うことや国旗掲揚は、皆が統一してすると決めるのではなく、戦争に対する思いには皆、違いがあるので、「する・しない」は個人で決めることができたら、それぞれの思いを尊重することができるのではないかと感じた。

平和記念資料館に行った時、私は怖くて写真をほとんど見ることができなかったが、外国から来られた人は立ち止まりじっくり見て、解説が流れるイヤホンをつけて真剣に聞いている人がほとんどだった。戦争で日本人がどのような被害にあったのかを、どこの国の人も今、知ろうとしてくれている。「日本人は韓国人を差別していた歴史があるのに・・・。」と、とても恥ずかしい気持ちでいっぱいになった。父の故郷で学んだことを忘れずに、私はこれからどんな人にも分け隔てなく接するように心がけることで、差別のない平和な世界に一步步近づけたらいいなと思った。

## 【奨励賞】

### 十人十色が大切にされる世界へ

立命館守山中学校1年 金岡 柚季

私は「十人十色」という言葉が大好きです。

これはみんながみんな違う個性を持っていて十人いれば十通りの好みや個性があるという意味を持っています。人はそれぞれの性格、好み、意見、価値観を持っているからこそ新しい発見があるのだと思っています。私の周りには個性豊かな友達がたくさんいます。外見は同じように

見えても、中身は十人十色。私はみんなの持っている個性のおかげで、分かり合うことができ、そして自分の意見を伝え合える楽しさがあるのだと思いました。時にはぶつかり合うこともあるかもしれませんが、しかしこのような経験が充実した毎日につながっているのだと思います。

しかし、最近「いじめ」という言葉が新聞やテレビにたくさん出てくるようになったと感じています。以前はあまり聞かない言葉でした。聞くとしても小学校で「いじめは絶対にしたらダメなことだよ」と少し聞く程度でした。しかし「ちょっと変わっているから」「みんなと違うから」といった普通と違うという理由でいじめにあっている人がいるということが日本では実際にあります。

このような理由でいじめをしてもいいという事には絶対にならないと思います。

日本は世界でもいじめは多い国です。また、海外に比べ「いじめ」が増え続けてしまっています。私はいじめがどうして増え続けているのかについて自分なりに考えてみました。そこで原因として考えられるのが日本の教育の方法です。日本は昔からみんな同じことをして、みんなが同じ方向を向いて、全員が同じレベルを目指して教育するという画一的な教育をしています。その為「普通」という考えが生まれてしまい「普通と違う」「みんなと違う」という理由でいじめにつながるのだと考えました。集団で行動したり、「みんなと同じ」ということを好んだり、人に意見を合わせる民族性の為、新しい事を始めたり、人と違う意見を持っている人を受け入れられず排他的になっているのではないかと考えました。

例えば、私の幼稚園はモンテリー教育でした。時間で区切ってみんなと一緒に歌う、お絵かきをする、外遊びをするという事はしませんでした。みんな一人ひとり自分の選んだお仕事を自分が納得し、満足するまでやりとげました。「見て真似て実際にやってみる。」自分で時間を決め、自分のやりたいことを何回も何回も熱中してやり遂げる経験をしてきました。

しかし小学校に入ると四十五分間先生のペースで授業が始まり興味あるなしに限らずいすに座り授業を受けなければいけません。言われたことをただ指示通りにこなすことにとっても戸惑いました。一人の先生が三十五人の生徒を見なければならず一人ひとりに対応することができないため、例外的な人を認めることが難しい環境が小学校にはありました。先生がしっかりしていて団結しているクラス程、人と違ったことをする人に対して冷やかな目になり排他的になってしまう場面がありました。

このような経験から「人を尊重できる世の中」にするか「排他的な世の中」になるかの違いは、教育と環境がキーポイントになると私は思い

ます。今、教育だけでなく社会が大きく変わる時代にきています。学校から帰ってきて家族と今日の出来事を話す時父母はいつも「今はそんな事も出来る様になっているの」と昔と今の違いを話してくれます。大きく変化している時代だからこそ、自分達で世界を作っていく環境を整えることができるのではないかと思います。相手の気持ちや豊かな個性を大切に、人を認め合う環境をみんなで作って、全員が笑顔でいられる世界にしたいです。

最後に私は一日も早く十人十色が大切にされる世界になり、一人ひとりが輝ける社会になることを願っています。

## 【奨励賞】

### それってイジメじゃない？

甲賀市立甲南中学校 2年 望月 蒼太

「その遊びに入ってもいい？」そう僕が言うと彼は、「いやだよ、あっちで遊んでろよ。」と言った。この会話は僕が小学四年生のときに受けたイジメで、思い出す度に気分が悪くなるような体験です。

「イジメはイケないこと」そのような考えを多くの人が持っていると思います。イジメとは相手に対して一方的に心身のどちらか、または両方に攻撃をくわえ続け、相手が苦痛を感じる行動・言動をすることです。僕はその中の仲間外れというイジメにあっていました。

ですが当時の僕は、イジメにあっていることを理解していなく、「最近あの子たち冷たいな～」と軽く解釈をしていて、気持ちがモヤモヤしていました。

そんな僕を見て不思議に思ったのか、当時よく一緒に遊んでいた友達が聞いてきたので、僕がどんなことを考えモヤモヤしているかを伝えました。すると友達は「それってイジメじゃない？」と言ったのです。僕は理解が少し追いつかず、その後の授業が頭に入ってこなかったことを覚えています。帰った後も「なんで僕はイジメにあったのだろう。」や「悪いことをしてしまっていたのかな。」という気持ちが頭の中をめぐって苦しく悲しい気持ちになりました。

それから数日が経ち、二者面談がありました。なので僕は勇気を振り絞り思いの全てを先生にぶつけました。「みんなで楽しく過ごしたい。」そんな本音を言えて心がスカッとして、「仲直りをするんだ」と思う気持ちが溢れてきたとき、僕の見る景色や考えが、大きく変わります。

した。

その後、イジメをしてきた生徒たちと、話し合う機会を先生が設けてくれました。それはイジメだと指摘してくれた友達に背中を押され、しどろもどろになりながらも自分が嫌だと思ったこと、「仲間外れにしないでほしい。」という気持ちを打ち明けました。すると少しの沈黙が続く、少し間をあけて次々に口を開いていき、「仲間外れにしてごめんね。」という言葉が飛び交いました。その言葉を聞いた僕の心からは、モヤモヤが退いていき、その後、友達と呼び合えるような関係へと和解していきました。

イジメをしてきた子供達と僕、どちらも同じ学校に通い、お互いが尊重し合うべき存在です。

今では、イジメをしてきたほとんどの人と以前より友好的な関係を築けています。ですが、「イジメをしてしまった」という罪悪感が心に残っているのか、中学生になった今でも「あっちで遊んでろよ」と言った彼とは、友好的な関係を築けていません。小学一年生、二年生のときは互いに親友と呼べる関係にあったにも関わらず、イジメが一度起きてしまっただけで、ここまで関係に違いができてしまったのです。

「それってイジメじゃない？」この一言がなければ僕は、イジメに遭っているという最初の通過地点にすら到達できず、より長く苦しむことになっていたのかもしれませんが。そんな僕を助けてくれて、「仲直り」というゴールテープの前まで連れてきてくれた友達、先生には今でも感謝しています。後は、僕が彼を知り、彼を受け入れ、ゴールテープを切るだけです。

僕はイジメに遭ってから、イジメに遭う人がいない、平和な社会を送るためには、一人一人が「人権を尊重する」意識を持つことが大切だと、考えるようになりました。

「人権を尊重する」とは、自分と相手の両方を、大切に思い、自分なりに理解し、考え、受け入れることだと思います。なぜなら、もし、僕と彼らが、そのように接することが、できていたのなら、このような悲しい体験をせずに済んだと、思ったからです。

僕は、相手を理解して、受け入れられるような人間になりたいです。そして、周りの人にも、そうなってほしいと願っています。人には、それぞれの心の形があります。なので、心を合わせようとしても、形が合わず、心に距離が開いてしまうことがあります。ですが、そのときに、自分や相手の心を切って、形を合わせようとするのは、結果的に、自分たちを傷つけることになってしまうので、間違っています。だから、そんなときは、心の形を切って合わせようとするのではなく、自分と相手が寄り添い合い、粘土のように変化させて、心を合わせるべきだと思います。また、その考えがイジメのない平和な社会へと、つながってい

ると、僕は信じています。

イジメのない平和な社会へ続く道を、まずは、僕が、歩いていきます。

## 【奨励賞】

### 高れい化社会について

甲賀市立甲南中学校1年 畠田 煌大

人は誰でも必ず年をとっていきます。高れい化社会の問題は、自分の家族、自分の未来について考えなければならない問題です。

ぼくには一〇一才になる曾祖父がいます。ぼくのように身近にお年寄りがいる人はたくさんいると思います。お年寄りのことは世間でも高れい化社会の問題としてテレビやニュースなどでも大きく取り上げられています。

ぼくは一〇一才の曾祖父のことが大好きで小さい頃からよく遊びに行っていました。曾祖父は自宅でお店をしていて、父と一緒に遊びに行くと毎回好きなおかしやジュースをくれます。それにいつも元気な声で話しかけてくれてその元気な言葉は今でもぼくの心の中に残っています。ずっと元気な曾祖父で近所のお年寄りのために一〇〇才までお店をやっていたのですが、一〇〇才のお祝いの時を最後にお店をやめて自宅ゆっくりと過ごすようになりました。今でも自分のことは自分ででき、しっかり自分で歩いて、ぼくには一〇〇才を超えているようには見えません。

だけど一緒に暮らしている家族からは大変なことがいっぱいあると言っているのを聞くことがあります。少し耳が聞こえにくいと、全然聞いていない、少し動くのがおそいと、早くしてほしい・・・とぼくにはつらい言葉やきびしい言葉を言われている時がありぼくは悲しくなるときがあります。でも、どちらも悪いわけではなく、どちらも一生けん命で大変なことなんだからだとぼくは思います。

人はだれでも年をとっていきます。分かっているけど身近で大好きな人が弱っていく姿を見るのはとてもつらいです。ぼくには何ができるのか・・・考えますが難しい問題で答えは全然わかりません。でもそんな時、元気な曾祖父の姿を思い出すと、ぼくが勉強やスポーツをがんばっているとすごく喜んでほめてくれていました。そして何より顔を見せに行くと行くだけでいつもすごく喜んでくれました。

ぼくには大きなことは何もできないけれど大切な曾祖父が喜んでくれることを少しでもすることが今までの恩返しになり、この気持ちが高れ

い化社会の問題の大きな一歩なのではないかと思います。お年寄りにイライラすることはあるかもしれませんが、いつかはみんなもそうなります。でもお年寄りの方々がぼくたちにしてくれたことはたくさんあり、ありがたいの気持ちと、支え合う気持ち寄りそってあげる気持ちが大切なのだと思います。ぼくは少しでもそういう大人の一人になって、この問題をこれからも考えていける大人になりたいと思います。

## 【奨励賞】

### ぼくの妹

甲賀市立甲南中学校2年 宮本 凌

ぼくの妹は、生まれつき病気をもって生まれてきました。染色体異常という、一万人に一人の確率の難病です。染色体とは細胞の中であって複数の遺伝子が記録されていて、ここに異常があると色々な障害が出て来ます。

妹は、七才の時にやっと歩けるようになったし、言葉も赤ちゃんみたいだし、すぐパニックを起こしてしまったりします。だけどぼくは、妹を変だと思ったことは一度もありません。学校から帰るといっしょに遊ぶし、休みの日はいっしょに買い物に行ったりします。

長い間歩けないので、買い物や通院は車イスを使います。

夏休みに妹が病院へ診察に行くことになったので、その日たまたま部活動がなかったぼくは、いっしょに付いて行きました。病院に着くと、待合室に小さな女の子とそのお母さんが診察を待っていました。女の子はすごく変な顔をして、車イスに乗る妹をジロジロ見てきました。でも女の子のお母さんは、そのことを注意してくれませんでした。ぼくはだんだん腹が立ってきて、

「なぜそんなにジロジロ見られなあかんの？」

と言ってしまいました。するとその女の子のお母さんは、ぼくたちをにらみつけてきました。ぼくはそれを見て腹が立ったけど、その後にとても悲しくなりました。妹は何も悪いことなんてしていないのに・・・。

ぼくはその女の子が

「なぜ車イスに乗っているの？」

と素直に聞いてくれれば、いやな気持ちにはならなかったのではないかと思います。

もし街中で障害者の人を見かけても、面白半分にジロジロ見ずに、

困っていないか声をかけてあげるなど、思いやりを持つことが大切なのではないかと思います。人間は健常者も障害者も、楽しく生活する権利は同じだと思います。だからぼくたちが障害のある人を助けてあげることが大事だと思いました。

最後に、ぼくの妹が大人になっても幸せに生きていける世の中になっ  
てほしいと思います。

## 【奨励賞】

### 「あたりまえ」を疑う力

甲賀市立甲南中学校2年 三谷 和奏

あなたは今、差別をしていますか。こう尋ねたとき、多くの人は「いいえ」と答えるのではないのでしょうか。ですが、私は思うのです。差別の多くは無意識のうちに起こるものだと。

私は、低身長症の方がスピーチをされている番組を見ました。彼女はスピーチの中で次のように話されました。「私が住みたいのは障害が特別視されるのではなく、普通だと思われる世界です。」この一言を聞いて私はハッとしました。今まで障害を持っている人や、高齢者、外国人、性的マイノリティの人など特別視することが「当たり前だ」「それが思いやりだ」とされてきました。ですが、当事者からしてみれば立派な差別かもしれません。たとえば、みんなと同じことをしただけなのに、自分だけ「すごい」などと言われると、まるで「あなたは普通じゃないのにみんなと同じことができてすごいね」と言われているように感じてしまうかもしれません。しかし「すごい」と言っている人も決して悪意があるわけでは無いと思います。その人なりの気づかひをしたつもりが、結果的に相手を傷つけてしまっているのです。思いやりを持って行動することは、誰にでも出来ることではありませんし、大切なことだと思います。だからこそ、その思いやりを大切に、相手が誰だろうと平等に扱い、助け合うことが今の私たちにできる大切なことなのではないでしょうか。

もう一つ、私が同じようなことを感じた体験があります。それは、中学一年生の三学期、学校で行われた人権学習の中で出てきた、一つの話聞いたときのことです。その話の登場人物は、A子ちゃん、B子ちゃん、A子ちゃんの母親で、内容はA子ちゃんの母親が、B子ちゃんを部落差別するというものです。この話を聞いたとき、私はあることに気が

付きました。それは、A子ちゃんの母親は自分が差別をしていることに気づいていないことです。あくまで、「A子のために」と思い、自分が間違っていることに気づいていなかったのです。私たちは、知らないうちに、学んだこと、教えられたことを「正しい」と思い込んでいたのかもしれない。一つ目の話も良かれと思って、その行動が正しいと思って差別をしてしまっていました。多くの人は、差別をしようと思っているのでは無く、知らず知らずのうちに差別をしてしまっているのだと私は考えました。

私は、この二つの体験から、差別というのは無意識のうちに起こるものだと気づきました。もしかしたら、私も、あなたも、知らないうちに差別をしてしまうかもしれません。それを防ぐために私たちに今必要なのは「あたりまえ」を疑う力なのではないでしょうか。

## 【奨励賞】

### イジリとイジメ

愛荘町立愛知中学校1年 中山 篤人

僕はいじめを実際に見たことがある。

小学校三年生の時、下校中にA君がDちゃんをあだ名でイジリ始めた。Dちゃんはいやそうな顔をして黙っていた。Dちゃんはいやそうな顔を見て追い打ちをかけるようにB君C君がイジリ始めた。A君B君C君は、笑いながら楽しんでいるように見えた。それを見た僕はとてもいやな気持ちになった。僕はとっさに「やめろよ。」とイジっている3人に言った。けれども三人はイジるのをやめなかった。すると、Dちゃんはシクシクと泣きはじめてしまった。僕は、泣いているDちゃんに「逃げよう。」と声をかけ、一緒にその場から離れた。友達付き合いの中で、仲間内でイジリ合っつてふざける場面は、よくあることかもしれない。しかし、イジめることは、相手が嫌がっていたら、それはもう、イジリではなく、イジメだろうと僕は思う。僕が嫌な気持ちになったのは、Dちゃんが嫌がっているのを見て、イジリがイジメに見えたからである。

イジることとイジメは、境界線が曖昧であると思う。なぜなら、いつ相手が「嫌だ」と感じるかによって、イジリにもイジメにもなりうるからだ。人によっては許容できるイジリであっても、別の人にとっては嫌だと思われるものだからだ。

また、イジリが、エスカレートして、イジメにつながる恐れもある。

このことから、イジること自体がよくないことなのではないかと僕は思う。

僕はこれまで、友達のことをイジったことがないかと聞かれたら、ないとは言えない。

じゃれ合いのつもりで、イジっていたかもしれない。しかし、自分はじゃれ合いのつもりでも相手は嫌がっているかもしれないという視点が抜け落ちていた。

今はSNSなどのツールを使って友達同士でコミュニケーションをとることが当たり前な時代になりつつある。文字だけのコミュニケーションは、相手の顔が見えないことから、相手の気持ちが読み取りづらい。そのため、対面同士の時よりも、簡単に、人を傷つけてしまうことがある。

実際SNS上で、イジられて傷ついたという友達の話聞いたこともある。また、対面の時と同様、直接人を傷つけてはいなくとも、何もしない傍観者になる可能性もある。何もしない傍観者はイジリやイジメとは無関係なのだろうか。僕はそうは思わない。

SNSの世界では特にこの傍観者になってしまう人が多いように思う。なぜなら、SNSの性質は、見て見ぬふりが、対面同士の時よりも簡単に出来てしまうからである。傍観するということは、イジリやイジメを容認していることと同じである。つまり、直接、手を下してはいなくても、イジリやイジメをしている人と同じである。

では、僕に出来ることは何だろうか。

一つ目は、言葉づかいに気をつける。人の悪口を言わないことはもちろんだが、普段何気なく使っている言葉や言い方が、人を傷つけてしまっていないか、よく考えようと思う。

二つ目は、人をイジらない。気心の知れた仲であっても、傷つけるような言葉は言わない。

三つ目は、傍観者にはならない。傍観者にならないということは、イジメられている人を助けるということであり、それはとても勇気がいることだ。もしかすると、次は自分がイジられイジメられるかもしれない。だからと言って、傍観者にはなりたくない。

自分だけではなく、自分の周りにも傍観者になって欲しくない。そのためには、友達以外の人にも無関心でいることをなくすこと、つまり周りの人のことを気にかけるということも大切なことだと思う。気にかける方法として最も簡単な方法は挨拶だ。話をしたことがない人でも挨拶であれば気軽に出来るからだ。それに、挨拶をすることで話しかけやすくなるし、お互い気分も良くなる。僕だけではなく、みんながこれを実践すれば、イジリやイジメの空気になりにくくなり、悲しい思いをする人が減ることにつながるのではないかと思う。

いじめは、いつでもどこにでも誰の身にも起こりうる。だからこそ、自分も常に当事者意識を持って人との関わりに関心を持ち続けたいと思う。

## 【奨励賞】

### 性別でなく挑戦できることに胸を張りたい。

長浜市立南中学校2年 北川 莉子

私は、長浜相撲クラブに所属して「女子相撲」をしています。

私が初めてお相撲と出会ったのは、通っていた幼稚園でした。

市内でもめずらしく、土俵のある園で、「そんきょ」や「四股」も園生活の一部でした。

お相撲はとても面白く、地域の相撲大会に出場したり、強くはなくてもお相撲が大好きでした。

しかし、「相撲は男の子がやるもの」そんなイメージを無意識に持っていたので、身体も小さかった私は自然と離れていきました。

ですが、七歳下の妹も同じ園でお相撲と出会い、なんと彼女は「お相撲がもっと強くなりたい！」と当時の私より小さい身体なのに昨年の子長児から相撲クラブの練習に参加し始めました。

ある日、妹の練習を母と一緒に見に行くとそこには妹が一番下の年齢で、小学生と一緒に相撲をしていて、男子も女子もいました。

土俵の上で、「そんきょ」に始まり「そんきょ」で終わる。男子も女子も力の同じくらいの子達が真剣に、時には楽しくお相撲をされていました。

「私もやりたい。土俵にあがって一緒に取り組みをしたい」

すぐに心の中に浮かびました。と、同時に

「私、中学生やし、女子やし、相撲するなんて、小学生ならともかくおかしいやんな」と、やりたい気持ちを消そうとしました。

でも、何度か見に行った時ついポロッと「私もやってみたいな」と小さな声で言ってしまったのを母が聞いていて、「やりたいのならやったら？先生?!」と母がすぐに参加して良いか聞きに行ってしまったのです。

私はびっくりして、先生や小学生のみんなに中学生女子がそんなこと言うなんてと笑われたらどうしようと心がドキドキしましたが、先生も初めはおどろかれたかもしれませんが、笑顔で「じゃあ小学生と一緒に

やけど頑張ってみるか？」と声を掛けてくださりホッと安心しました。

相撲クラブのメンバーも先生も保護者の方もみなさんとても優しく、お相撲の練習に行くのがとても楽しみになりました。

その反面、私はまたドキドキしていました。

「周りにバレたらどうしよう」

「絶対に隠さなきゃ」

「バレたら中学校生活も終わるかも」

とまで考えていました。

そんな時に、先日初めて公式戦に出場する機会がありました。

全国から集まった女子相撲をしている人達。初めての公式戦への緊張と目の前で行われる真剣な取り組みと、学びや迫力、ずっと楽しくて、結果は初戦敗退でしたが、自分の弱い所を見直し日々の筋トレや練習に活かしてまた頑張りたい気持ちになった時に、母から

「アンコンシャスバイアス」（無意識の偏見）

自分自身では気づいていないものの見方や捉え方のゆがみ・偏り。という言葉を聞きました。

私がお相撲に感じていたこと、それがこれだ！と思いました。

女子相撲の大会でみた皆さんは、とても輝いていました。

あんなにドキドキしていた隠さないといけなそう思っていた気持ちも吹きとばすほどにです。

「○○だから」

そんなワードに日々悩み、辛くなっている人がいるかもしれない。

でも私はこれからも、お相撲が好きでやりたい気持ちが続く限り、頑張ります。

そして、女性でも、中学生でも、何歳でもやりたいことをやって楽しむ。頑張れる自分でいたいです。

## 【奨励賞】

### いじめゼロの世界

長浜市立浅井中学校の生徒の作品

テレビや新聞で度々伝えられている、いじめ問題。僕もいじめを経験した一人です。

小学三年生の時、クラスの子にいじめの被害を受けました。最初は、消しゴムにマジックで落書きをされたり、嫌な手紙を渡されたりしてました。それがだんだんエスカレートして、机を隠されたり、ノートを

破られたり、時には見えないところで、暴力をふるわれたりすることもありました。その時は、学校にも行きたくなくなり、朝起きるのも辛く、毎日がまったく楽しくありませんでした。いじめのストレスで、身体にもチックという症状が出るようになりました。

僕は、嫌なことは嫌と言える性格なので、最初の頃は、やられたら止めてと反発して、いじめと戦っていました。それでもいじめは終わらず、言っても無駄だと思い、だんだん戦う気持ちは無くなってしまい、いじめられてもずっと我慢するようになりました。

でも、耐えられなくなった僕は、泣きながら学校での出来事を両親に伝えました。両親は僕の話聞いてくれて、担任の先生に相談に行ってくれました。他にも僕みたいに、いじめを受けている子がいて、学校で大きな問題になり、保護者会が開かれました。何度も学校と保護者で話し合いが行われ、いじめを解決することができました。

よくニュースで、いじめられていることをひとりでかかえこんで、耐えられなくなり、不登校になったり、自殺をしてしまったりというのを見ることがあります。僕は、いじめが起こったとき、どうしたらいいのか改めて考えました。

僕の場合は、両親に相談することができたし、学校以外にも、サッカークラブの友達がたくさんいたので、ひとりで悩むことはありませんでした。でも、いじめに悩んで、不登校や自殺を選んでしまった人は、誰にも相談できずに、ひとりで抱え込んで、苦しんでいたのだと思います。いじめを受けたときには絶対にひとりで悩まず、誰でもいいので、近くにいる人に必ず相談するべきだと思います。

いじめは些細なことから始まります。いじている側は、ただ、遊びの延長だったり、からかったり、いじったりしていると思っているだけで、いじているという感覚はないのかもしれない。でも、いじめられている側にとっては、それはいじめであり、心に深い傷を負って、それが消えることは一生ないと思います。なので、それがエスカレートしてしまう前に、一日でも早く解決することが大切だと思います。

今もいじめに悩んでいる人はたくさんいると思います。僕は、自分の体験から、もし、まわりでいじめを受けている人を見つけたら、すぐに相談にのって、解決方法を一緒に考えられる人になりたいです。まわりには、自分の味方になって、力になってくれる人が、必ずいると思います。

今後、いじめに悩んでいる人が、ひとりでもいなくなることを、僕は願っています。

## 【奨励賞】

### 明るい未来に向けて

長浜市立びわ中学校1年 藤田 藍衣

私は、小学生の頃、福祉の体験という貴重な体験をしました。実際に障害を持つ方が来て、お話を聞かせていただいたり、障害を持つ方の世界はどんな世界なのか体験をしたりという内容です。車いすに乗ったり、視覚障害の体験をしたり、いろいろした中で、私が思ったことは、ほとんどが誰かの手を借りている、ということです。障害の方自身は、迷惑をかけたくないだろうし、誰かの手は借りたくないと思います。でも、きっと誰かに助けてほしい場面は多々あるのだろうと思いました。なので手を借りやすい声のかけ方をする必要があるのではないかと、思いました。そう思いお母さんに聞いてみると、「大丈夫ですか？」より「何か手伝うことはありますか？」の方が頼りやすくなる、と言ってくれました。私なら「大丈夫ですか？」と言われると大丈夫じゃなくてもつい「大丈夫です。」と返してしまうと思います。もし困っている方がいたら、障害者でもそうでなくても、声のかけ方に注意して声をかけることができればいいなと思います。そもそも声をかける勇気がなければ意味がないので、勇気を出して声をかけてみたいです。

また、福祉の体験では、目の見えない方が作った、紙製の小さな箱をもらいました。目が見えないから、可哀想、というわけではなく障害のあるなしに関係なく、特技や趣味を楽しめるんだなと感じました。以前の私は、「障害の持っている方は可哀想だな」とどこかで思っていた気がします。私みたいに普通に字を書いたり、読書したりできない、と決めつけないで、色々な可能性がある、ということを考えさせられました。その箱は、複雑な作りで、私は作れそうにないものでした。

使いやすいし、見た目も可愛かったので、私は日常で使う文房具などを入れて使っています。私は障害者にはこんなことできない、と思っていたことが恥ずかしく感じました。障害者の方も、自分の楽しみや特技をいかしたりしているのだと今でも感じます。そう思うとなぜ私は障害者だから、という理由で勝手に決めつけていたのだろう、と思いました。小さい頃から教わっていた「平等」という意味についても、再確認できました。また、目が見えない方も読書ができるように読み聞かせてくださる方がいたり、手話や、点字などもあります。想像以上に障害者のための工夫があり、とても驚いたのを覚えています。私も、いつか手話や点字を少しでも覚えたいな、と思います。そうやって覚える人が増えると、障害者もいろんな人と交流できるようになっていって、より楽しく

毎日が過ごせると思いました。私もそのように考えさせてくれた方々のように、そう呼びかけていくと、きっと障害者にとっても明るい未来が待っていると感じます。

私は、そんな福祉の体験を通じ、小学6年生の夏休みには、福祉のポスターを書きました。勇気を出して声をかけよう、ということと、声をかけるときは「大丈夫ですか？」だと人を頼りにくい、ということを書きました。賞こそ取れなかったものの、福祉のために色々考えてポスターを書き上げることができて、嬉しかったです。障害者が、自分の楽しみを見つれたり、便利に生活できたりするのは、福祉に関わってきたいろんな方々が、たくさん考えて、それを実現してきたからこそなんだと感じます。今では、私の中で当たり前になりつつあるスロープなども、誰かが考え出した障害者のためのものだと思うと、何か考えさせられませんか。学校の玄関にもスロープがあるのを、見つけました。私が書いたポスターや、この作文も、福祉や障害者のために思って書いたのだと思うと、やりがいや誇りを感じます。もし私が障害者の立場なら、可哀想、と思われるよりもずっと、福祉などに関わってくれると嬉しいです。障害者のことは本人にしか分からないけれどきっとそうだと思います。1人でも多く福祉に関わる人が増え、障害者にとっても誰にとっても明るい未来が待っているといいな、と感じます。そのために私が考えた、声のかけ方、誰にも思ってほしいこと、それを、呼びかけるよりまず私がすることで、明るい未来につながっていくのだと思います。きっとすごく難しいことだと思うけれど、どんな人も平等に、幸せにできるようにできることを一つでも見つけたいと思いました。

第43回全国中学生人権作文コンテスト  
法務省人権擁護局長・全国人権擁護委員連合会長  
感謝状贈呈校

大津市立北大路中学校  
草津市立高穂中学校  
愛荘町立愛知中学校  
長浜市立高月中学校  
長浜市立西中学校  
長浜市立余呉小中学校

法務省人権擁護局と全国人権擁護委員連合会では、長年にわたって多数の作文を応募していただいている中学校などに対して敬意を表し感謝状を贈呈しています。



## 例えばこんなことがあったとき・・・

- ☑ 友だちからいじめを受けている
- ☑ インターネット上で悪口を書き込まれた
- ☑ 暴力を受けて悩んでいる

## 秘密は守るよ。勇気を出して相談してみよう！

### ★ 電話で相談！

こどもの人権110番 **0120-007-110**

(フリーダイヤル)

月曜日から金曜日まで（年末年始、祝日を除く）  
8時30分から17時15分まで

### ★ メールで相談！

こどもの人権SOS-eメール

インターネット人権相談

検索

<https://www.jinken.go.jp/kodomo>

### ★ SNS (LINE) で相談！

法務局LINEじんけん相談

友だち登録して御相談ください。

月曜日から金曜日まで（年末年始、祝日を除く）  
8時30分から17時15分まで



## みんなのこころ 元気になあれ！

発行 令和7年3月

発行者 〒520-8516 大津市京町3丁目1番1号（大津びわ湖合同庁舎）  
大津地方法務局・滋賀県人権擁護委員連合会

禁無断転載

本作文集の作品を地方自治体等が機関誌等に転載する場合は、  
以下に御連絡ください。

大津地方法務局人権擁護課

電話 077-522-4673

「いじめ」や暴力行為等は人権侵害です。

法務局・地方法務局では、  
人権侵害による被害を受けた方を  
救済するための活動を行っています。

お気軽にご相談ください。



人権イメージキャラクター  
人KENまもる君・人KENあゆみちゃん



人権擁護活動  
シンボルマーク

このシンボルマークには、『人権』は全ての人が生まれながらに持っているものであり、世界中の人々の『人権』が最優先に尊重され、共存し合っていかなければならないという願いが込められています。